

四万十市ふるさと応援団員からの便り

満州での出会い

相井 道夫

京都府城陽市
昭和7年生まれ

今から60数年前、旧満州に関東軍の派遣要請により、廟嶺京都開拓団があった。そこは吉林省樺甸と北朝鮮白頭山を結ぶ幹線道路の傍ら、山間僻地の現地人集落に日本人が数家族ずつ配置され、開拓団が構成されていた。終戦時には約500人が生活していた。

大清溝江川崎開拓団の人々は、この道路とは異なるが、廟嶺からさらに数十キロ離れた奥地に入植されていた。敗戦後の昭和20年8月24日、廟嶺に避難して来られた事から、私たちとの出会いが始まった。9月5日から現地人の襲撃、略奪、無差別殺害が起こり始め、日本人家族の悲惨な歴史が始まった。

然し、幼少期の私は、江川崎の人々と合流した事も、同じ体験をして吉林まで避難し、翌6月博多港の引き揚げまで同じ経路をとった事も知らなかった。

昨年5月、私の拙著を読まれた田中市長さんから「西土佐村で生存する人々がおられるので、再会を考えたらどうですか」と連絡があるまでは…

『さいはてのいばら道』を編集された西ヶ方の武田邦徳さんからも電話を頂いた。武田さんの悲しい手記記述には深い感銘を受けた。私自身、廟嶺到着直後、保安屯集落に1か月ほど滞在した。まだ幼少期として集落の全体像は定かでないが、村や周辺の川、池の情景が記憶に残っている。悲痛な場面を想像しながら、その時本当に申し訳のない気持ちになった。もし廟嶺に京都開拓団がいなかったら、江川崎の人々は巻き込まれなかったか…ご家族のご冥福を深くお祈りいたします。

昨年7月17日、京都の2人(黒田、相井)で西土佐を訪れた。民



相井道夫さん(右2人目)、黒田雅夫さん(右端)
(昨年7月、半家・河野信夫さん宅)

宿には、武田邦徳さん、武内増美さん、竹内美佐子さん、上山比佐子さんらがみえていた。

一緒に収容されていた撫順の工業学校跡では、その日の食糧として高粱が配給されたが、副食品はない。衣服、着替え、ふとんなし。暖房もなく、所持金なしで、物も買えない。働ける大人の男以外は教室床板の上で極貧の難民生活、毎日寒さに耐えながら生活していた。そんな体験から、当時の子供たちには日本人同士の仲間意識があったのだろうか。

この日の会話では、廟嶺で襲撃された体験や、避難途上での襲撃、掠奪など果てしなく湧いて出てくるが、話し合う時間が短い。生きていてこそ当時の状況が話し合えるという、人生の有り難みをほんの一瞬味わった。2時間ほどがあっけなく終わった。

翌日は、武内勉さんらの案内で開拓団慰霊碑と忠霊塔に参拝。権谷せせらぎ交流館(分村資料室)にも行く。過去の戦争体験を風化させない為にも、次世代の教育の為にも、公のこうした歴史資料、写真展示館がどの県(京都を含めて)の地域にも必要ではないだろうか。中川末子さんを訪ねた。その人は、撫順露天掘りで同級生と地底まで降りて石炭拾いをして生活費を捻出していたと手記に載せていた。私も同じことをしたが、それは大変危険な体験だった。

中川さんは親戚の河野信夫さん宅におられた。ちょうど法事の最中で、親戚縁者の賑わいの中でご馳走になつてしまった。このお宅裏には立派な墓地があり、一同が参拝した。

河野さんも同じ引き揚げ者で竹内美佐子さんの弟。席上、石炭拾いや帰国船白龍丸での悲しかった水葬の状況が話されていた。恐怖の体験や悲哀の感情は、何年経っても消えないと思われた。

3日間の旅で、四万十市の各地や足摺岬を案内や見学させて頂き、大勢の方々の思いがけないご厚意を頂き、有り難うございました。第2のふるさとになった四万十市の将来の発展とお世話になった皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

貴船石(庭石)

黒田雅夫さんから寄贈される

四万十市ふるさと応援団員の黒田雅夫さん(京都府亀岡市在住、昭和12年生、石材店経営)から本市に対して、貴船石(庭石)の寄贈を受けました。

黒田さんは廟嶺京都開拓団の元団員。撫順の難民収容所を離れ、中国で孤児になったあと、開拓団から遅れて帰国しました。

今回「ふるさと応援団員からの便り」をいただいた相井道夫さんと一緒に、昨年7月、西土佐に来られました。

いただいた貴船石は京都鴨川の流域にあたる貴船で産出される変成岩であり、いまはほとんど採れません。庭石では最高級品とされており、市役所玄関前に案内板と一緒に設置しました。

ほかに鞍馬石、白川石などいろいろいただきました。玉姫さくら会館(中村新町3丁目)の庭に設置をしています。

